

積算四方山話②

積算は、失敗して学ぶ

野呂 幸一

公益社団法人日本建築積算協会 名誉会長

最初の積算業務

大阪の建設会社に入社し、配属先が積算課となった。新入社員も3ヵ月ぐらい経つと徐々に本番の積算業務に就くようになった。

初めは、雑金物と建具の積算であった。図面から費目を拾い、明細書に項目を記載した。これらは「ケ所物」なので、初心者にも容易であった。しかし先輩からは、積算は簡単だが、見積金額に占める割合は高いので、重要な仕事であると言われた。また、出来るだけ丁寧に姿図を描くように指導を受けた。

その後、土工事、躯体、木工事、鉄骨、仕上げと進み、1年もすると積算できる範囲がかなり広がった。

積算は、1週間に1工事ぐらいの仕事量であったが、対象となる設計図は次から次へと変わり、図面の読解力が急速に向上した。

設計図は、自社の設計部と外部の設計事務所のものがあつたが、自社の設計部は、図面の精度がいい加減で間違いが多くあつた。そこで設計者に対する質問事項が多くなつた。しかし設計の担当者によっては、間違いを指摘されると不機嫌になつたり、怒つたりする人がいた。一方では、直接私の席に飛んで来て、間違いを修正し、質問に答える人もいた。

設計図は、積算が完了して初めて完成することを知つた。

ある時、駐輪場の屋根が角波鉄板で設計されていたところ、課長から「こんな所に金をかけてはいけない。スレート板に仕様を変えるよう言いなさい」と言われた。

当時は、積算課が設計仕様もチェックしていた。

これには驚かされたが、積算業務に仕様の知識が不可欠であることを教わり、構造材、仕上げ材など仕様の知識を身に付けるよう心掛けることになった。

また、仕様と同時に施工方法も理解するよう指導された。

積算の失敗

かなり自信をつけてきた頃、民間の倉庫の積算を行うことになった。RC造2階建てで細長い大きな倉庫であつた。見積明細書を作成し、値入れを行う担当者に渡し、入札に参加した。

2、3日した頃、担当の営業が大きな声を出しながら私のところに来た。

「契約が取れちゃったぞ。何か数量落ちがあつたんじゃないか。この工事は取らないつもりで高めの単価を入れたんだ。調べてくれ」

急いで調べてみると、根切りの土量が少ないことが分かつた。これはGLの取り方に間違いがあり、私は、設計GLから掘削をしていた。本来ならば、現地GLから掘削すべきところ、図面に記載がなく、良く調べもせず積算をしたことが原因であつた。倉庫の1階の面積は広く、掘削土量はかなりあるのに、半分以下となり、結果として入札金額が安くなってしまった。

この工事は落札したため、当社で施工することになったが、現場は赤字工事となり、苦勞をかけたてしまった。

また、民間の商業ビルのガラス工事を担当した

時も大きなミスを犯してしまった。

この工事は、特命工事であったが、明細書を作成して値入れの担当者に回した後、この担当者が大きな声で私の名前を呼び、私の席に来た。

何事かと思ったら、「グレーペンが落ちているぞ」と言う。グレーペンとは、熱線吸収ガラスであり、この商業ビルの前面で使用されていた。この工事は、ガラスブロックや化粧したガラスなど内装にガラスが多く使われており、明細書に計上した項目は、数多くあった。しかし肝心のグレーペンをうっかりして落としてしまった。

もし、値入れの担当者が気が付かなかつたら、損害を出していた。値入れの担当者に後で聞くと、「新米のお前が積算したというので、間違いがないか注意して見ていたんだ」とのことであった。

またある時、現場の所長から電話があった。

「あなたが積算をしたということだが、軽量鉄骨の壁下地がだいぶ少ないがどうしてか」とのこと。調べてみると何ヶ所かで計算をしていなかった。

このことを所長に連絡すると、「下地は、コンクリートで計算してあるのだろう。現場は、何かで見てあればそれでいい」と言った。下地をコンクリートで見ていたかどうかは定かでなかったが、軽量鉄骨の下地で計算していなかったことは事実であり、申し訳なく思った。

その他にも、新人時代にはいくつも失敗を重ね、その度に自分の不注意を恥じた。二度と同じ過ちはしないぞと誓って積算に精を出した。

積算は、失敗して学んだことが多い。

現場の積算

ある工場の工事が現場で始まっていた時、現場の敷地周辺に浅い側溝を掘ることになった。

課長から呼ばれ、敷地の図面が渡され、掘削土量を積算するように言われた。

「法の勾配は、どのくらい見たらいいのですか」と課長に聞くと、「法などいらぬ。直に掘れ」と言われた。そこで法を付けずに垂直に

掘った土量を計算し、現場に渡した。その後しばらくした頃、その現場の所長から電話があった。

「土量が少ないがどうしたのか」とのこと。そこで、直に掘削したことを告げると、所長は、「そんなことをされては困る。現場では直に掘るが、積算は、法を見てくれ。そうしなければ現場は儲からないじゃないか」と怒られた。

当時、当社は、積算課が現場の数量を計算することになっており、現場では独自に数量は出せないことになっていた。

そこで工事中に設計変更などがあれば、必ず積算課で数量を計算した。図面が不十分な場合は、積算の担当者が現場に赴き、現地で実態を確かめながら積算をした。

これは現場の労力を軽減するだけでなく、顧客に対し正しい数量の増減を示すものであり、現場の恣意による計算を防いでいた。

現場の儲けは、積算する数量で増減するために、現場は、積算者に対し好意的であった。現場へ赴く積算者は、ベテランが多く、1ヵ月以上も現場に滞在して積算する者もいた。

彼らの話を聞いていると、まず現場で食べる昼飯が美味いとのこと。それから夜は、イッパイ飲み連れて行ってもらおうとのことであった。

ある時、一人のベテランから「今晚、現場から接待がかかっているが、このところ現場からの接待が続き、お腹を壊してしまった。今日は辛い。君、代わりに行ってくれないか」と頼まれた。

「えっ、現場のことなど全然分かりませんよ。積算も経験不足で役に立つとは思えません」と答えると、ベテランは、「積算の話はない。ただ酒を飲んでいればいい。なんとか頼む」と言われた。幸い私は酒が好きであり、少々飲んでも酔わない。酒には自信があった。

そこでベテランの代わりに現場の指定する飲み屋に行くと、初めてお会いする現場の所長と年配の職員が待っていた。私は若造でしかも代理なのに嫌な顔一つせず、楽しく接待してくれた。

良き時代の思い出と言えよう。